
ねこぬこっ！

羽崎 暮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこぬこっ！

【Nコード】

N8992Z

【作者名】

羽崎 暮斗

【あらすじ】

ある雨の日、俺は一匹の黒い子猫を拾いました。

妹が『クロ』と名付けたその猫は、なぜか妹ではなく俺に懐いて、拾った日の夜、一緒に寝ました。

朝起きたら、横に居たのは、一言で言うなれば『美少女』でした。しかも全裸の。

甲斐性の無い俺が、全力で叫ぶ所からこのお話は始まります。

これは、一匹の（一人？）の黒猫と、『Mr・平均値』な主人公の、ほのぼの系ラブコメとなります。

派手な戦闘や、魔法や特殊能力なんてものは、一切とほいいませんが、ほほ出ません。

第一章『ねこ？ネコ？猫……だったよね？』（1）

—— 状況を整理しよう。

俺は篠原^{しのはら} 優斗^{ゆうと}。16歳高校生。

背丈も顔もスポーツも勉強も財力も権力も……何もかもが平均値。『順位』というものが存在する物事においては、俺より上ならば、「まあまあまあ、平均よりは上か」なんて言われる始末。

顔は……高校に入ってから若干目付きが悪くなってきた……ような気がする。

え？自己紹介を兼ねた自己確認は要らない？

もうちょつと待ってくれ。こんな事から確認したくなる状況なんだ。

なんなら、自分はどの様な行程を経て生まれたのかすら確認したい。

……いや、やめておく。『両親の×××』は、人生のトラウマ第2位だ。むやみに掘り返すべきでは無い。

今は10月。季節は秋。

焼かれる様な暑さはすっかり無くなり、風も心地よい。なんなら肌寒いくらいだ。

俺にとっては、暑くも寒くもないから、最高の季節である。

確か昨日は雨が降っていた。

朝から、この時期に珍しく土砂降りで、学校をサボろうか…… 4
回考えた。

結局一日中降っていて、帰りも、このまま学校に泊まってしまお

うか…… 6回考えた。

当然、泊まるわけにいけないので、部活が休みになった友人、高杉^{すぎ}と帰路につき、自宅近くの商店街入り口で別れた。

唐突だが、ウチには両親が居ない。

両方とも、外資系コンサルティング企業で働いていて、父親の方がそこそこの地位にいるらしい。詳しくは知らない。

母親はその秘書。

ざっくり言えば、父親が遠くに異動になり、母親も秘書としてついて行くことに『した』らしい。

そこそこの地位に居るなら、異動なんてあるのか？秘書の融通がきくのか？これが権力か？

…… 大人の世界はわからない。

んで、こうなると当然、『引越し』という難関が立ちはだかる。俺と『妹』はこれを全力で拒否。確固たる意思に基づき拒否。

両親にとっては予想通りの反応だったらしく、4年程前に建てた、比較的新しい我が家を空けてしまうのも悩ましいところだった様だ。結論↓『優斗が居れば大丈夫よね？ 2人だけで行っちゃいま

しょ、あ？な？た？』

篠原優斗、2歳年下の妹の美咲^{みさき}と共に、一戸建ての我が家に取り残された…… 中3の冬。

話戻って。

そんな我が家の本日の夕飯を考えながら、商店街で買い物をした。金は困らない程度に仕送りをもらっている。

途中、八百屋のおっちゃんにトマト（妹大っ嫌い）を3つ貰った。魚屋のおっちゃんにも、アジを一匹貰った。

社交性はある方だと自負している。

—— 自宅への帰り道、もう目と鼻の先という所で、一匹の真っ黒な子猫に出会った。

電柱の下に、ダンボールに入れられ、放置されていた。ご丁寧に、雨に濡れない様、傘まで置いて。

それでも猫は濡れていて、今夜は冷えるだろうから、危ないんじゃないかと思つて連れて帰る事にしたんだ。

両親が居ないし、借家でもないので、『返して来なさい』なんて言われる心配はなかったから。

家に帰るなり、俺が左手に抱えている猫を見た妹が発狂。

嫌いな訳では無い。むしろ真逆。

腰まであるツインテールを、左右にブルンブルン揺らし、大きな瞳をキラキラ…いや、ギラギラさせて大はしゃぎ。

あまりに騒ぐので、猫が驚いてしがみついてくる。

大っ嫌いなトマトを口にねじ込んで黙らせた。

濡れていたので、風呂に入れてやった。

猫は風呂なんてとてつもなく嫌がるものだと思っていたが、まったく嫌がらなかったな。もうすでに濡れていたからか？

その後、夕飯作りに取りかかった。

メニューは、ハンバーグとサラダとアジの刺身。

バランス良すぎてにやけた。

夕飯を作る間、普段は自分の部屋で、某動画サイトに入り浸っている妹は、猫と戯れていた。

ティッシュを細くちぎって、ひらひらさせてたな…。猫ってあの程度でいいのか？

感極まった妹が命名。子猫の名前は『クロ』。黒いからクロ。シンプルすぎるが、悪くはないだろう。

19時を回って、夕飯にした。

クロには、牛乳と、アジを5切れ程。

子猫の割にはよく食べたな。やっぱり魚に対するがっつきはすごかった。

22時くらいまでテレビを見て、自分の部屋に戻る事に。

部屋に行こうとすると、それまで妹と戯れていたクロが、走り寄って来た。

てつきり妹に懷いたもんだと思っていたが、悪い気はしなかった
ので、自分の部屋に連れて行った。

『お兄ちゃんズルいズルいズルい……』とずっと言われていたが、
知ったこっちゃない。

部屋で課題を片付け、インターネットでネットサーフィン。

この間ずっと、俺の左手でクロがじゃれていた。

ネットサーフィンをやめ、本棚から読みかけのラノベを取り出す。
ベッドに転がり、眠たくなるまで読書。これがいつもの生活サイ
クル。

眠たくなったので、本をたたみ、机に放る。

電気を消し、布団に包まると、クロが枕元に来た。

寝返りで踏んでしまわないか心配したが、頭の横だったし、特に
気にしない事にした。

そして眠りについた。

——ここまでいい。おかしい所はない。

『変わった事あった？』と、母親に聞かれたら、『猫を拾ったよ
ママ』と答えるくらいだ。

言っておくが、俺は『ママ』とは呼ばない。『おふくろ』だ。

——ではなぜ……。

——なぜ……俺の横に全裸の少女が居る？

長い黒髪。綺麗な顔。幼くは感じない。美咲と同じくらいだろうか。

美咲を『かわいい系』とするなら、この子は『美人系』といった印象を受ける。

美咲と同じくらい、と言う割には、発達のいい身体のライン。……イカン、これは朝から刺激が強い。

——そして、猫耳と尻尾。

………わからない。特殊メイクか？

わからない。クロはどこへ？

わからない。なぜ全裸？

俺なんかしちゃった？

そんなバカな。俺にそんな度胸はない！
酔った勢い？酒なんて飲めねえよバツカ！！

ダメだ。散々振り返ったがわからん。

ラノベにはこんなシーンいくらでもあった。

『俺だったらやつちゃうね』とかなんとか、思春期男子らしい、調子に乗った考えについて、作者様に謝罪すべきだろうか。

何もわからない。頭の中で、メリーさんがゴージャンドした俺は…
…。

「
——ッぎやああああああああああああああああ！！
！！」

全裸の美少女を前に、『叫ぶ』しか出来なかった俺を、笑いたくば笑えばいいさ。

第一章『ねこ？ネコ？猫……だったよね？』（1）（後書き）

どうもどうも、羽崎にございます（・・・）
初めましての方は初めまして。早めに戻るボタンを押す事をお勧め
しますの（・・・）

『神理郷』の方に行き詰まりました…
気分転換に新規投稿（・・・）

第三者目線を主人公目線に。
ファンタジーを恋愛ラブコメに。

どっちが面白いのか…。
こっちのが出来がいい希ガス↑
まあ、新しいからでしょう（ - ω - ）

神理郷同様、まったり更新しますので、何卒よろしく願いします
m（——）m

(2)

「ツギやあああああああああああああ！！！」

叫んだ。とにかく叫んだ。

喉が裂けるんじゃないかと思うくらい叫んだ。

ちよつと裏声混じっちゃったよ恥ずかしい。

叫んだだけじゃなく、布団を引き剥がし、勢いよく転がり出た。ベッドから落ちるわ机で頭打つわで、最悪な目覚め。

「んもおゝ、朝からなに裏声混じりに叫んでんの？」

妹の美咲が、目をこすりながらドアを開けた。

俺の叫びで起こしてしまった様だ。申し訳ない。

「……………」

「……美咲？」

妹、硬直。

当然っちゃ当然か。一目でわかる異常があるのだから。

「……ぱたん…。」

「美咲！これには深いワケが！！いや、ワケがわかんねえからパニックってんだけど！！ちよつと待ってえ！！！」

病室のドアでも閉めるかの様に、実に静かに閉められた。

どうやらあらぬ誤解をしたらしい。まあ、誰が見てもそう思うの
だろうが。

「……………あゝ……」

妹の背中を追う事も出来たが、誤解を解くよりも、朝のしんどさが
上回った瞬間。

きつと今の俺は、ドアの前で『orz』な体勢になっていること
だろう。というかなってる。

「どーしたの？」

「いや…美咲の誤解をどうやって解くか……は？」

あれ？女の子の声…？。

…いつの間にか、『orz』な俺の横に、妹の誤解の元、素っ裸
の美少女が居た。

同じ体勢で横に並んで、なぜか頭から生えている黒い猫耳をピコ
ピコさせながら、長い黒髪を床に垂らして俺の顔を覗き込んできて
いる。

「おわあああおー！！」

orzのまま転がり、壁にはりつく形になった。ついでにまた頭
打った。

「だ、だ、だ、誰らお前！！なんで俺の部屋に居るんだ！！な
んで裸なんだ！！」

「クロはクロだよ？……昨日…名前…くれたじゃない」

一瞬だけドモって呂律が回らなかったが、頭の中でランデブー決め込んでる疑問達を口から叩き出す。

するとその少女は、ペタツと女の子座りになり、うな垂れながらボソボソと答えた。

その座り方はやめて欲しい。髪と手で大事な部分は隠れているものの、やっぱり刺激が強すぎる。

「クロ？俺の知ってるクロは猫だ！」

目を手で隠しながら、ありのままの真実を口にする。顔が熱い。

「そんな事言われても……私にもわからないよ……」

「……わからない？」

「うん」

「……」

おかしな事を…。

ただ…俺の部屋の窓は鍵もしまっている。ドアにはかけていないが、家には美咲しか居ないから特に必要はない。

家自体は玄関も当然鍵はかけているし、窓も閉めている。

つまり……外部から部外者の侵入はあり得ない。

しかしこのクロと名乗る少女は俺の横に居た。

そして、俺の横に居た黒猫のクロは居ない。

「………クロ？猫の………クロ？」

「そっだよ？」

「………」

「信じてないでしょ」

「いや……ん」

信じられるわけがない。

『朝起きたら猫が人になってました』なんて言おうものなら、脳外科辺りに連行されかねない。あるいは精神科か。

逆に信じてもらえたとしても、俺はそいつのために救急車を呼ぶ自信がある。

「……『どうしたんだ？一人か？』」

「？」

「『今日は冷えるだろうし……ウチに来るか？』」

「ッ？」

何を言い出すかと思えば……これは…。

「あなたはそう言っで、私を抱きかかえてくれた。『寒いよ』って言ったら、『大丈夫』って言っでその手で包んでくれた。すごくあったかくて……心地良かったよ」

「……マジか……」

この子が言ってるのは、俺が子猫……クロを見つけた時に投げかけた言葉だ。一言一句間違っていない。

ウチに連れて帰るために抱きかかえたら、消え入りそうな小さな声で鳴いたのも覚えてる。

怯えてるのかと思っただが……寒いと言っただのか…。

「お家に入れてもらっで、お風呂にも入れてもらっで、ミサキと遊んで、お魚も牛乳も貰っだし、名前もくれた」

「……」

「あなたとも遊んでもらっだ。あなたの手が、あっただかくて優しくて……撫でてくれるのが嬉しかった。」

「…………マジで…………クロ…なのか？」
「そうだよ？」

マジかよ…。

目を隠してる手の指の隙間から見える、少し身を乗り出して小首を傾げる少女の姿に頭が眩む。

「…………じゃあ、なんで猫が人の姿になってるわけ？」

「知らないよ…………私はただ…、この人とずっと一緒にいられたらいいのについて思つて…………そしたら急に体がこんなになつて」

「ちよつと待て。自分の体が変わつてたつてのか？」

「うん…。どうしようか迷つたけど、あなたは寝てたし、私も眠かつたから…………寝たの」

「寝たのかよ！」

思わずツツコんだ。

そんな大事が真横で起きていたのに、起きなかつた俺もアレだが、ぶつちやけ起こしてくれても良かったじゃないか。

…………十中八九困るだけだろうが。

というか、さらつと恥ずかしい事言われた様な…。

「…話は分かつた。ちよつと待つてくれ」
「？」

実際にはまだわかつちやいないが、とりあえずは、話を聞くよりも、この全裸[？]の少女をなんとかするべきだと踏んだ俺は、目を隠したまま（見てないからな？）立ち上がり、ドアを開け、向かいの部屋…美咲の部屋のドアをそつと開けた。

(3)(前書き)

2話にして3000ユニーク・700PV突破ありがとうございます

m () m

え、少ない？

貴方にとってはそうでしょう！

しかし！私にとっては過去最高の記録を打ち出したのだよ）、・D・
（

という事で、気を悪くなさないでね？

この子ちよっと舞い上がってるだけですから？
そのうち現実を突きつけられて落ち込むから？

というわけで、第3話です（・ω・）

(3)

断言しよう。

俺は妹に劣情を催す様な変態ではない。

確かに妹は大切にしているし、女の子としても見ている。

だがあくまでも家族だ。それ以上でも以下でもない。

ではなぜ…。

なぜ…俺が今、妹の下着を持ち、肩を震わせて汗を垂らしているのか…という…だ。

俺の部屋に、『猫だったのに人間になった』という謎の少女、ク口が居る。

この話の真偽は置いておこう。俺だって信じちゃいないのだ。確かにそれしか考えられない状況ではあるのだが、これを信じるならば、俺は本格的に脳外科か精神科に通う必要が出てくる。

それはさておき、一番の問題はというと…。

全裸なのだ。その子が…？

手と長い黒髪で大事な部分は隠すという逆に卑猥な状態に、俺の方が耐えかねて、話を途切つて自分の部屋を出て、向かいの妹の部屋に来た。

逃げた訳ではない（ぶっちゃけ逃げたい）。そのクロという少女は、背丈が妹に近かったので、とりあえず服を拝借しようと考えた訳だ。

妹にはあらぬ誤解をされた様で、顔色を伺う様にドアを開けたのだが、妹は部屋に居なかった。

朝6時過ぎという、朝飯の準備をしたりする俺ならともかく、妹が起きるのは早すぎる時間なのだが、すでに下の階に降りたのだからう。

呼ぶのも忍びない気になったので、俺が服を適当に引っ張り出そうとしたわけだが…。

まずはクローゼットから真っ白なワンピースを取り出した。こんなもの持ってたのか。

問題は下着だ…。

確かに、洗濯も俺がやってるから、いつも触ってはいいる。

ブラもパンツも、デリカシーなく洗濯カゴに入れてるもんだから、『お年頃なんじゃねえのかよ』とかつぶやきながらも洗濯機にぶち込んでいる。

流石にしまうのは妹にやらせてはいるが、妹の下着なんて（穿いてる姿は除いて）見慣れた物だ。

見慣れた物…なのだが…。

こうして、チェストの小さい引き出しいっぱいきちんと詰められている下着共を目の当たりにすると、とてもイケナイ事してる

気分になる。

落ち着け俺。これは不可抗力だ！

まずは俺の部屋の全裸の少女をなんとかしなければならいだけなんだ！

そのために下着上下セットを拝借するだけだ！何を動揺しとるんだ俺は！

……不可抗力とは違うな。

こだわる必要はない！ちゃちゃっと取ってしまえば……。

——だめだ。合わない？

あの子は、妹と比べて発達[？]の良[？]すぎる所[？]があつた。そりゃあもう、一目でわかるくらい。

パンツはいいだろう。

だがこっちは……残念ながら妹では遠く及ばない……！

くッ！

どうする……？

おふくろのなら……と思ったが、親父とおふくろの私物はウチには一切残っていない。

ノーブラ……？いや！それはまずい！主に俺の色々が！
どうすれば……ッ！

「何してんの？お兄ちゃん」

という事である。

片膝をついた状態でチェストの前に座り、左手小指でパンツをキープしつつブラを持ち上げている俺は、背中に刺す様な視線を受けながら、若干震えている。冷や汗垂らしながら。

「何してんの？お兄ちゃん」

これが殺気というやつか。

喉元にナイフを突きつけられた状態で、撃鉄を引かれた銃を後頭部に押し付けられている様な状態を経験するとは思ってもみなかった。

「もう一度訊く。何をしているんだ貴様」

「……………」

軍の教官みたいな口調になっちゃったよ？

もっ……『お兄ちゃん』とは呼んでくれないのかい？

……………落ち着け俺。

事情を説明すればいいじゃないか。

美咲教官だつて朝の状況は見たはず。

「…あの〜」

「言い訳はいらん。なぜその様な行動に至る様になったのか。明了かつ簡潔に10文字以内で答えよ」

10？厳しッ！

何かないか何かないか何かないかッ！

「……………下着を貸してくだ「却下だ」」

ゴゴンッ！

後頭部を蹴られたか何かで、その反動でチェストに頭をぶつける。

「ぐおおお！！頭がッ！頭がああ！！」

前から後ろからの衝撃に、脳がシェイクされる様な気持ち悪さと共に、頭蓋骨割れたよねコレ・クラスの激痛が走る。

目覚めて一時間足らずで3回頭をぶつけるとは。

脳細胞何個死んだと思つてんだよ！

「で？ほんとに何してんの？」

あ、戻った。

とにかく説明せねば。と思つて振り向く。

美咲は既に髪をツインテールに結つて来ていた。

「~~~~ツ。お前もさつき見たろ？俺の部屋の全裸の子。悪いけど服貸してやってくれ」

「別にいいけど。着衣S。Xなんてするからだよ」

「違う。女の子がそーゆー事を言うんじゃないや」

「違う？じゃあどんなプレイしたら服が着れない状態になんの？」

「まず根本から違うからな？俺なんもしてないからな？元々全裸だったの」

「まあ、甲斐性なしのお兄ちゃんに限つてそれはないよねー。って、元々全裸？」

「……………ああ」

「全裸のまま連れ込むとは…」

「こいつめんどくせー」

詳しくは後で説明する。と付けたし、ワンピースとパンツを持つて（ブラは断念）部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8992z/>

ねこぬこっ！

2012年1月9日21時56分発行